

武道、そして武士道

毎年六月の第二日曜は、鹿島神宮の武道の日である。

午前中は塚原ト伝ゆかりの鹿島新当流をはじめ、鹿島神流、鹿島神伝直心影流という、鹿島を発祥の地とする古武道各流派と、天真正伝香取神道流をはじめ、毎年参加される七流派によって奉納演武が行われた。

今年は正午近くには大雷雨となつて、稲光りと共に雷鳴が轟く神前に、鹿島新当流の岡見、内田両師範が真剣を振る姿は、多くの人々に深い感銘を与えたようである。

正に古武道の真髓を表現して、ものに動じない姿が其処にはあつた。不動心とも表現することができると思う。

大雷鳴に身が震え、手許にいささかなりとも狂いが生じれば、刃挽きの刀であっても傷を負う。両師範の演武は、古武道に半世紀の歳月を重

ねた練達の古武士の姿であつたのである。

鹿島神宮神前においての古武道奉納演武は、昭和四十五年に塚原ト伝歿後四百年を契機に神前奉納をはじめからで、平成十九年の今年で三十八回を重ねた。

単発的には古武道の演武が大衆の面前で行われるようになった明治以降に遡るが、回数としては少い。

それは、武技が生命を賭したいわゆる秘技であつて、古武道は他見を許さないことを堅く守ってきたからである。

他見を許さば、秘技を破る方策を練るのは当然であつて、いかなる秀れた刀法も裏を搔かれるおそれがある。

たとえば、現在でも鹿島新当流の道場は小さく、窓はのぞかれない小さな高窓がある限りで、弟子もしく

は関係者以外が垣間見ることは不可能である。

戦国時代までの、甲冑を着用した武士と戦うには、兜、鎧胴、籠手等の金属で守られた部位を除き、その隙間をねらう剣法が主流であつた。これを介者剣法という。

江戸時代になって、甲冑が無用の時代ともなると、介者剣法は衰退して、新しい剣法が興隆した。その稽古は時代を経て木刀から竹刀へと変り、面、胴、籠手を着けて、丁々発止と打ち合つて技を磨いた。

現代の剣道はこの竹刀剣法の集大成ともいうことができる。

剣道は段位を中心に体系づけられて、稽古が進めば段位は容易に昇ることができ、励むことへの意欲が湧く利点がある。

これに対して古武道は、鹿島新当流を見ても、目録、印可、免許、皆伝の四種に止まり、他の古武道も同様で、剣道の五級から始まり、十段階の段位まで昇る多様さには到底かなうところではない。スポーツ性を持ち、青少年の励みとなる剣道とは比較にならないのは当然である。

しかし、古武道も若者たちに見直されつつあり、毎回の奉納演武でも世代交替が行われてきていることは確かである。

二年後の第四十回奉納演武は五年毎の大会に当り、二十流派前後の参加が予定される。

平成元年のト伝生誕五百年記念大会には、甲源一刀流、示現流兵法、兵法二天一流、柳生新陰流兵法、柳生心眼流術、新陰流兵法、馬庭念流、水鷗流等々、著名剣士の名をほうふつと思ひ浮ばせる古流の参加を頂いたが、また素晴らしい流派の参加を期待したいものである。

さて、武道の日の午後は、小笠原流一門による百手式の奉納である。弓術の素晴らしさが、奥参道において練り広げられ、見学者が思わず眼を見開く光景が続くのである。

武道の日。武道の基礎を築かれた鹿島神宮の御祭神武甕槌大神の神威を仰いで行われる演武は、六月の梅雨期ではあるけれど、大雷雨をもとせざ実施され、多くの人々に感動をもたらした。武士道精神の発露ともいえる一日であつた。

武道は鹿島神宮の御祭神である武甕槌神（たけみかづちのかみ）から始まる。よって武道の祖神という。

神代の昔、天照大御神（あまてらすおおみかみ）の命を奉じて、武甕槌神は出雲に降り、大国主命（おおくにぬしのみこと）と国譲りの話合いをされ、国をひとつにまとめあげられたと古事記にある。

日本書紀には経津主神（ふつぬしのかみ）という香取神宮の御祭神と同行しと書かれているが、武甕槌神の神剣を節霊剣（ふつのみたまのつるぎ）とするところから、神剣の霊位を人格神とする考え方も古くから伝えられていた。

しかし剣をたずさえて行っても剣を振うことなく、大国主命の御子の建御名方神との力競べで国を統一したその神武をたたえて武道の祖神と仰ぐのである。

漢字の発生時に戈を止むと書いて「武」の文字ができたように、武とは平和を創り出す力をあらわすということができよう。

第十六代仁徳天皇の御代に、鹿島の神官である国摩真人（くにまづま

ひと）が境内の高天原に祭壇を築いて熱禱し、大神から師霊の法則を授けられたのを日本の武道の発祥とする。

これより鹿島七流といわれるように、鹿島、香取両神宮の神官が武技を伝え、武道が振興した。

貴族を中心とした平安時代から、武者を中心とした鎌倉時代となり、武技は益々盛んになり、多くの合戦を経て武将たちに倫理感が生れてくることとなる。

平安末期の平家滅亡の折、敵味方の若武者たちが見せた心情は、永く平家物語などによって語り伝えられていく。

仁、義、礼、智、信、その他の理念が美しく燃え上るのも、鉄砲伝来までで、戦国末期は倫理感を失って荒れ狂い、容易に主君を裏切ることが可能であった。

ようやく江戸時代となり、平和を取戻したとき、荒武者たちは儒教的観念の下に武士として生れ変わる。武士という文字はもののかと読んで古語を意味して、古くから存在したことが理解されるが、戦国時代に

は多用されていない。武者溜（だまり）、荒武者、落武者、武者人形等々、武者と表現している。

戦国時代を終えて、日本人が棄てたものは鉄砲である。武士たちは戦国時代に多用した鉄砲を武士の持つ武器とはしなかった。ちなみに、日本軍は昭和二十年の敗戦まで、明治時代の鉄砲で戦っていたのである。

他の武器は改良を重ねても、鉄砲に重きを置かなかつた日本人の心情には、武器という意識が乏しかったのかも知れないと思う。

戦国時代の経験から、戦場の道徳倫理が考えられ、江戸時代に入ると武士道論が活発になった。

各地方、各藩によって基礎的な考え方が異なり、中でも佐賀では儒教思想を拒否して「葉隠れ」という特異な武士道を起した。

薩摩、土佐、水戸など独得の雰囲気は「ポ」という音でくくられた。

薩摩ッポ、土佐ッポ、水戸ッポがそれであり、とくに水戸は二分して争い、明治維新後、新政府の役に立つ人材は皆無に近い状態であった。激しさは勇気と共に必要欠くべからざるものであるが、忍耐のない激しさは自滅をもたらすものである。

新渡戸稲造の「武士道」という名著は、外国人に日本を、日本人を理解してもらうために書かれ、英語版だけでなく世界各国語に訳され、世界の人々に熱読されているが、現在の日本人の幾人がこの内容を理解できようか。

現在、時代小説に秀れた作品を見出すことは容易であるが、反面、武士道の理解もなく、ただ剣をもてあそぶ殺人者を画く小説も多くなりつつある。礼を知らないのである。仁を知らないのである。義をわきまえないのである。

大正、昭和の日本が追いつめられた時代でも、各所、各人に武士道が発揮されているのを見て、狂気ばかりの時代ではなかったかと安堵する。

今の時代、平和ではあるが、人の心に武士道はない。今こそ厳しく学び、武士道を人心に取戻す努力を続けたいものである。

武士道協会の設立が時宜を得たものであることを確信して、あえて一文を草する次第である。矢作幸雄記